コラム 5-4　虚偽記憶研究の背景

虚偽記憶が明らかにされた背景には，いくつかの社会的問題があったことが今では知られています。

1980 年代以降，トラウマ（心的外傷）が不適応を引き起こすというフロイトの初期の理論を安易に援用して，抑圧された性的虐待の記憶を引き出せば不適応は治ると考えた一部のカウンセラーが、催眠療法を行い，幼児期の記憶を引き出そうとするアプローチが流行しました。1988 年には，精神医学の素人が出版した書物では，女性が理由もわからず「うつ」に悩んでいるのであれば，幼児期に受けた性的虐待の記憶を抑圧されている可能性が高く，あらゆる「生きにくさ」は幼少期の性的虐待にあるという主帳がなされ，この本は一般大衆に広く評判となりました。

このようなことを背景に，多くの人がカウンセラーが「不適応には幼児期に性的虐待があったはずで，それを思い出せていないだけだ」という暗示をクライエント（相談にきた人）に与えたことによって，事実かどうかわからない幼児期の記憶を思い出し（実際には虚偽記憶を作り出し），多くの人が自分の親に対して訴訟を起こすなど，社会問題となったのです。

1980 年代には，フロイトの精神分析は科学の世界からは葬られていたのですが，社会（素人の世界）では，その亡霊が復活していたのです。この忘れられた幼児期の性的虐待の訴えの流行だけではなく，悪魔的儀式虐待をはじめ，この時代のアメリカでは，他の先進国では考えられないような社会問題が広がっていました。悪魔的儀式虐待というのは，悪魔崇拝者の儀式に子どもたちが供されて，性的・肉体的に虐待されたとする主張で，1980 年代に全米各地で告発が相次いでいました。

しかし，これは後になって，モラル･パニック（世間一般が，ある種の社会的･民族的マイノリティに属する人に対して形成する「彼らは道徳や常識から逸脱し，社会全般の脅威となっている」という誤解や偏見）に過ぎなかったと考えられています。なお，同じ時期には，多重人格の多発もアメリカでのみ生じています。

身に覚えがない虐待で訴えられた親たちも，根拠のない記憶を作り出した催眠療法や回復記憶療法のセラピストを訴えるという，親子による訴訟合戦がアメリカ全土で展開される事態になりました。こうした訴訟の過程で，問題の核心となっている幼児期の記憶自体の信頼性について，法廷側から科学的な判断を行うための参考人として，記憶の専門家が呼ばれることになりましたが，その代表的な心理学者が本書で紹介したロフタスでした。

彼女らのような研究者による実証的な研究成果にもとづいて，大半の虐待の訴えは事実無根な虚偽記憶による冤罪であったと判断されました。それとともに，当時全米を揺るがせたキリスト教界の著名人が娘への性的虐待をしていたという訴えに関する裁判の過程で，被害を訴えた本人が医学的検査によって、主張するような虐待を受けた痕跡が全くなかったことが証明されたことも，幼児期の記憶の信憑性が疑わしいと判断されるきっかけになりました。また，こうした問題とともに，多重人格障害の流行というアメリカのみで見られた不思議な現象も解消されることになりました。